

ろりぽっぷ保育園 「優秀園実践提案研究会」 開催レポート

2019年7月27日（土）、2018年度ソニー幼児教育支援プログラム「優秀園」の「学校法人ろりぽっぷ学園ろりぽっぷ保育園」において、「優秀園実践提案研究会」を開催しました。仙台市の保育園や幼稚園、認定こども園の保育者や保育・教育関係者を中心に、約80名の参加がありました。

以下にろりぽっぷ保育園による開催レポートを掲載いたします。

研究会概要

- (1) 日時：2019年7月27日（土） 10:30～16:25
- (2) 会場：園内環境見学…ろりぽっぷ保育園・ろりぽっぷ幼稚園
全体会…仙台市沖野市民センター
- (3) 主題：「科学する心を育てる」～「やってみたい！」子どもの思いを叶える保育～
- (4) プログラム：
 1. 10:30～12:30 園内環境見学
 2. 13:00～13:45 開会式・実践発表
 3. 13:45～14:45 協議会
 4. 15:00～16:15 講演：宮城教育大学教授 佐藤 哲也氏
演題「子どもの想いをつなぐラーニング・ストーリーの創造」
 5. 16:15～16:25 閉会式

園内環境見学

ご参加の方々に、各保育室や園庭を自由に参観いただいた。これまでの保育の経過（ラーニングストーリーの提示を含めて）や保育者の思い、環境設定の意図などを伝えることで、皆様からは、具体的な子どもたちの遊びの姿を思い浮かべながらの質疑もいただき、保育内容の発信の機会となった。

実践発表

「科学する心を育てる～宝石ってどこにあるの？～」をテーマに、実践発表を行った。

"子どもの些細なつぶやきや子どものきらめく心の動き"その一瞬を捉え、保育者が子どもの思いを大切に関わっていくと、子どもの好奇心や瞳の動きが変わっていくことを実感した。このような保育の輝きを、子どもと共に創り出す営みを積み重ねてきた。子どもが楽しいと感じることを保育者も全力で楽しみ、「子どもの思いが叶えられていく瞬間」を共に体験することで、科学の根っこが育っていくのだと考えた。そして、子どものやりたいことを叶えていくことで、「科学する心」がどのように育まれていくのかを、日々の保育の営みの中から具体的な遊びの姿を通して発表した。



質疑応答

- ◎ 石の活動は3歳児クラス全体で盛り上がっていたのか、興味をもっていた子どもから遊びが広がっていったのか？
 - 興味をもった一部の子どもたちから遊びは始まった。環境の一つとして発見した石を展示したことで、宝石作りなどへと遊びがつながり、その後の展開となった。それぞれ興味をもつところは違い、そこを大切にすることで、最終的にはクラス全体の活動へと広がっていった。
- ◎ ラーニングストーリーの具体的な実践とは？
 - 初めはどんなことを書けばよいのか悩みながら書いていたが、一日の子どもの姿を追い、どのような育ちがあるのか保育者同士で対話を重ねながら取り組んでいった。3歳以上児は集団としての育ちも

捉えながら、熱中して遊んでいる姿をクローズアップして記述している。

◎ 心を揺さぶられる体験をラーニングストーリーとして可視化しているが、それを見ている保護者の反応は？

→ 園での子どもたちの取り組みをラーニングストーリーや対話で伝えていくことで、「家にあった石を持ってきました」と持ってきてくれたり、出掛けた先で石を拾ってきてくれたりなど、保護者も一緒に子どもと探究し、成長を見守ってくれていた。

◎ どのように子どもの興味を広げていくのか。

→ 石の事例は3歳児であったが、3歳児の担任だけではなく、園全体の保育者が関わっている。他クラスの保育者も子どもたちが行っていることにアンテナを張り、互いに、今までの経験を伝え合っている。担任だけでは悩むことも多いが、全職員で関わり、保育者間で話をすることで明日の保育につながっている。



グループ協議

実践発表をもとに、自園の保育の取り組みや今後の課題について考え合う、有意義な場となった。

① 自園の保育の取り組みについて

- ・ 食育から、子どもが不思議だと思うことを引き出している（しげる保育園）
- ・ 野菜に触れる経験から、興味が湧き、栽培活動につながった（ろりぽっぷ第二小規模保育園）
- ・ 買い物に行った際に、お店の人から苗の植え方や土の作り方を教わった（多賀城すみれ保育園）
- ・ 自分たちで育てた食材で、夏野菜カレーを作った（こじか園）
- ・ 屋上の園庭に土粘土を取り入れ、自然と触れ合えるようにしている。（荒井マーヤ保育園）
- ・ 少人数の園の為、年上の子の刺激を受けて欲しいと思い、沖野園に出かけている（ろりぽっぷ第二小規模保育園）

② 実践発表を聞いて、取り入れたいと思ったところ

- ・ 子どもたち一人一人の声に寄り添いながら、保育者自身が保育を楽しむことが大切だと思った。
- ・ 研究ができる環境（物的・人的環境）を作っていきたい。
- ・ ラーニングストーリーを取り入れたい。
- ・ 保育の経過を展示することで、可視化し、情報を共有できる場を作っていきたい。
- ・ 様々な先生の気づきを環境に取り入れていきたい。
- ・ 本実践のように、五感に響く体験をさせてあげたい。
- ・ 成功する流れを計画してしまいがちだが、失敗の想定もし、経験させてあげたい。
- ・ 園内で完結しているが、外にも目を向けて、子どもの心に火がつくような援助をしていきたい。
- ・ 0、1、2歳の積み重ねが大事だと感じた。未満児の関わりを変えていきたい。

③ 自園の保育の取り組みや保育の実現に向けての課題について

- ・ 「やりたい」の思いを保育者同士で共有することが難しい。
- ・ 一年目でも意見を言える環境を作っていきたい。
- ・ クラスの枠にとらわれず、保育をしていきたい。
- ・ 施設は変えられないので、保育者の声掛けや関わり方を変えていきたい。
- ・ 保育について、話し合う機会をもっと多くしていきたい。
- ・ 失敗や成功を経験できるようにしていきたいと思った。
- ・ 「ここに行きたい」と思ったときに行動することが難しい。
- ・ 子どもが自由に遊び、「考える」という経験にあまりつながっていないため、興味も単発的になっていることを変えていきたい。



演題：「子どもの想いをつなぐラーニングストーリーの創造」

「科学する心」とは、頭より心が動いていて、気になって仕方がないという状態である。子どもは実生活の中で目の前に立ちはだかる困難に立ち向かう等、様々な体験を積み重ね学んでいくのである。

エジソンは失敗を失敗と捉えない。ろりぼっぶ保育園の子どもたちは失敗をたくさんしている。保育者の関わりとして、子どもたちの失敗を否定しない、要領よくやろうとしないこと。また、子どもと同じ目線になることが大切である。「科学する心」は、遊び・生活の中にたくさんあるが、保育者が気づいてあげられるかが重要になる。

◎幼児教育における自然

子どもたちは自然に興味を抱き、自分の目で見て、肌で感じるのである。花等、匂いは元からあるがそれに気づけるかがポイントになる。

動物は「嫌だ」と思ったら逃げるが、植物はじっとして動かない。しかし命はある。また、生き物を育てるのであれば名前を付けると良い。名前を付けることで生き物を名前と呼ぶようになる。もし、死んでしまったら「～が死んじゃった」等、具体性が出てきて生き物と関係を結ぶことになる。その際、食用にするものには名前を付けないことが前提である。

子どもは大人から育てられる存在であるが、植物、生き物を育てると世話をする立場になる。子どもたちも将来、大人として子どもを育てる立場になるが、動植物を育てることで、自分を今育ててくれている大人の考えを予感するようになるのである。幼児期は色々なことを予感することが大事になる。環境との相互の関わりで子どもは育っていく。自然は何一つ同じものがない、変化するものだから面白く、遊びになり学びになるのである。

◎遊びの中の学びは何か

年長児がやっているからやってみたい（憧れ）の眼差しで観察した後、子どもたちは模倣する（観察模倣学習）。学びの種は自然の中にたくさんあるが、それに出会えるように保育者が仕掛けることが必要である。また、その際に環境の中に保育者の意図やねらいがあるかが重要である。「なぜここにこれがあるのか」を答えられるのが保育、答えられないのは保育ではない。

◎「体験」と「経験」は何が違うか

人を頼りにすることも大事であるが、依存していると何もできなくなる。だから、一つひとつ幼児期に経験していくことが必要なのである。また、科学とは身近なものを知る、理解する、自分たちの生活が豊かになるように活用することである。幼児期はそうするためにたくさんの経験をしていく。

体験は“生きる活力”になり、人生に潤いが生まれる。遊びは基本的に体験であり、偶然性・個別性・非連続性の為、言葉にすることが困難である。「あ～！」「お～！」というような、感じる世界。しかしそれだけでは生きていけないから経験を積み重ねるのである。経験とは学習、労働である。経験というのは道具として使うことが出来ると共に、言葉によって共有ことができ、対話によって分かり合える。

体験を言語化することで経験になる。言葉で語られ、対話の記録として残していく、その方法としてラーニングストーリーを行っている。記録はただ単に文字にするのではなく、それを見ることによって、心がよい覚まされることに観点を置いてみる。

◎子どもの想いをつなぐラーニングストーリーの創造

様々な仕掛け、アイデアを準備し、始まり・気づき・分かち合いを大切にしていく。活動と学び、育ちの記録としてラーニングストーリーを活用する。そのようにすることで、保育者も子どもたち自身も成長を確認できる。

また、保育を可視化することによって説明責任の材料になり、保育展開が構造化される。それを保護者や地域の方にも発信していくことで園の理解にも繋がっていく。

現在は保育者が書いているが、今後保育者が書いたラーニングストーリーの中に子どもが参画してくる可能性も考えられる。昨日、今日、明日と繋がっていくと人生・生活になる。ラーニングストーリーは“命が輝いている”“心が色々なことを感じている”姿なのである。